

総合文化研究所 Workshop Series 第七回

ローベルト・ヴァルザーの絵画批評における時間性

報告 木村千恵

スイスのドイツ語作家ローベルト・ヴァルザー（一八七八―一九五六年）は、同時代のアヴァンギャルド運動からは距離を取りつつも、その作品が独自の前衛性を備えていることから、現在ではモダニズム作家のひとり数えられている。彼のモダニストとしての特質のひとつとして挙げられるのが、さまざまなジャンルの芸術作品を自作に組み込む手法である。これは、同時代の造形芸術で用いられた「カラーージュ」の技法と類似性をもつものといえる。報告者は、ヴァルザーがこうした技法をどのように形成・発展させたのか、また彼がどのような意図からこうした技法を用いていたのかを探ることを目的としている。

ヴァルザーが「カラーージュ」技法に至るまでの過程を考察する手がかりとして、本発表では絵画というジャンルを取り上げた。絵画はヴァルザーの創作にとって重要な芸術ジャンルのひとつであり、モチーフの連関という内容的な側面のみならず、描写や構成方法などの形式的な側面においても、その影響の大きさが読み取れる。このことから、彼の文学的方法論の確立には、目にした絵画を言葉によって語る事が重要な役割を果たしているのだと考えられる。ヴァルザーの特徴的な技法を検討するにあたって、空間的表現と時間的表現という、絵画と

文学との差異がどのように意識されているかが問題となる。そこで、絵画のなかに描かれている出来事の時間がどのように捉えられているのかを考察した。

ヴァルザーが「絵画的な物語の語り手 (ein malender Erzähler)」として挙げているフラゴナールの絵画について書かれた散文草稿では、語り手による描写のプロセスから、ロココ様式の構図のもつダイナミズムが捉えられていることがわかる。さらに、この散文の語り手は外界の出来事の観察に、こうした絵画の認識過程を適用しようとする。こうして、ヴァルザーは自身自身を取り巻く流動的な世界を絵画的一瞬として捉え、文章に移し替える。こうした実践によって、さまざまな素材を元の文脈から切り取ると同時に、対象そのものを細密に描写する数多くの散文が生み出されることになったといえる。

以上のように、絵画の観察という経験は、ヴァルザーが外界を認識する際の枠組みとしての役割を果たしている。このような絵画的な知覚経験によって、流動的な外界の景色は一つの瞬間として切断されると同時に、細密に描写されることになる。こうして書き留められたさまざまな断片的文章が、ヴァルザーの「カラーージュ」作品を構成する要素となるのである。

発表日 二〇一八年十二月十二日 (水)

